

## 第七章 朧月夜の物語 村雨の紛れの密会露見

[第一段 源氏、朧月夜と密会中、右大臣に発見される]

そのころ、尚侍の君(かむのきみ)まかだたまへり(は右大臣家に里帰りなさっていました)。瘡病(わらはやみ、熱病)に久しう悩みたまひて(に長患いされて)、まじなひなども心やすくせむとてなりけり(宮中では憚られる厄払いの加持祈祷などを心置きなくする為のものでした)。修法(しゅほふ、護摩炊き)など始めて、おこたりたまひぬれば(症状が治まりなされたので)、誰も誰も、うれしう思すに(喜んでいましたが)、例の(すると例によって源氏が)、めづらしき(滅多に無い)隙(ひま、会える機会)なるをと(だからと)、聞こえ交はしたまひて(手紙を遣り取りなさって)、わりなきさまにて(無理矢理に側仕えの女房に手引きさせて)、夜な夜な対面したまふ(夜毎に密会なさいます)。いと盛りに(若い盛りで)、にぎははしき(華やいだ)けはひしたまへる人の(顔立ちの方が)、すこしうち悩みて(少し病んで)、瘦せ瘦せになりたまへるほど(お瘦せになった具合は)、いとをかしげなり(非常に美しかったのです)。

後の宮も一所におはするころなれば(大后も同じ邸にいらしたので)、けはひいと恐ろしけれど(しのび逢いが暴露するのは非常に恐ろしい事でしたが)、かかることしもまさる御癖なれば(そうするとますます燃えて禁忌を犯す事を生甲斐に為さる御性格なので)、いと忍びて(危険を冒す忍び通いが)、たび重なりゆけば(何度も続けば)、けしき見る人びともあるべかめれど(様子を察する女房たちも居たでしょうが)、わづらはしうて(面倒な事になるのを恐れて)、宮には(大后には)、さなむと(そうとは)啓せず(けいせず、申し上げ奉りませんでした)。

大臣(おとど、父君の右大臣は)、はた思ひかけたまはぬに(全く気付いていなさらなかったが)、雨にはかにおどろおどろしう降りて(雨が急に激しく降って)、神いたう鳴りさわぐ暁に(雷が大きく鳴り響く夜明け前に)、殿の君達(大臣家の子息たちや)、宮司(みやづかさ、大后付きの役人)など立ちさわぎて(などが保全確認に忙しく歩き)、こなたかなたの人目しげく(どの部屋も調べ回って)、女房どもも怖ぢまどひて、近う集ひ参るに(尚侍の近くにも集まって控えていたので)、いとわりなく(源氏はそのまま)、出でたまはむ方なくて(帰る事も出来ずに)、明け果てぬ(朝を迎えてしまいました)。

御帳のめぐりにも(帳台の周りにも)、人びとしげく並みみたれば(女房たちが大勢並んで控えていたので)、いと胸つぶらはしく思さる(源氏と六姫は気が気ではありません)。心知りの人二人ばかり(事情を知る女房の二人だけが)、心を惑はず(気を揉んでいたのです)。

神鳴り止み、雨すこし小止みぬる(をやみぬる、小降りになった)ほどに(時に)、大臣渡りたまひて(右大臣が主殿を出て)、まづ(初めに)、宮の御方におはしけるを(大后の部屋を見舞ってから尚侍の部屋に向かわれたのを)、村雨(むらさめ、短時間にぎっと降る俄か雨)のまぎれにて(に気を取られて)え知りたまはぬに(源氏と尚侍は気付かずに居らした所に)、

軽らかに(実の親子の気安さで)ふとはひ入りたまひて(ふと部屋に体半分お入りに為って)、御簾引き上げたまふままに(御自分で御簾を引き上げなさりながら)、

「いかにぞ(変りは無いか)。いとうたてありつる夜のさまに(ひどく荒れた夜だったので)、思ひやりきこえながら(心配していたが)、参り来でなむ(今になった)。\*中将、宮の亮(みやのすけ)など、さぶらひつや(様子を見に参っただろうか)」 \*注に<中将は右大臣の子息、宮の亮は皇太后宮司の一人。>とある。

など、のたまふけはひの(仰る様子が)、舌疾に(したどに、早口で)あはつけきを(慌しげなのを)、大将は、もののまぎれにも(この切羽詰った中でも)、左の大臣の御ありさま、ふと思し比べられて、たとしへなうぞ(両大臣の父親振りがつい可笑しくなって)、ほほ笑まれたまふ。げに(確かに)、入り果ててもものたまへかしな(ちゃんと御部屋にお入りに為ってから仰れば宜しいのに)。

尚侍の君、いとわびしう思されて(とても心苦しく御思いに為って)、やをらみざり出でたまふに(ゆっくりいざり出て御出でに為ると)、面(おもて、顔色)のいたう赤みたるを(が随分赤みがかって居らしたので)、「なほ悩ましう思さるるにや(まだ体の具合が悪いのだろうか)」と見たまひて(と思ひ為されて)、

「など(どうして)、御けしきの例ならぬ(顔色が普通ではないのだろう)。もののけなどのむつかしきを(物の怪は恐ろしいから)、修法延べさすべかりけり(祈祷をもう少し続けさせるべきだった)」とのたまふに(と仰いましたが)、

薄二藍(うすふたあい、赤みの薄い紫)なる帯の(色の男物の帯が)、御衣にまつはれて引き出でられたるを見つけたまひて(尚侍の着物にまわり付いて引き出されているのを見つけ為されて)、あやしと思すに(変に思っちらっしゃると)、また、畳紙(たたうがみ、懐紙)の手習ひなどしたる(に歌などを書き損じたものが)、御几帳のもとに落ちたり。「これはいかなる物どもぞ」と、御心おどろかれて、

「かれは、誰れがぞ(其れは誰の物なのか)。けしき異なるもののさまかな(見慣れない物のようだぞ)。たまへ(此方へ遣しなさい)。それ取りて誰がぞと見はべらむ(手に取って誰の物か確かめよう)」

とのたまふにぞ(と仰ったので)、うち見返りて(尚侍も振り返ってみると)、我も見つけたまへる(自分でも其の畳紙を見つけなさいました)。紛らはすべきかたもなければ(誤魔化しようも無かったが)、いかがは応へきこえたまはむ(如何お応え申せましょう)。我にもあらでおはするを(尚侍が呆然自失していらっしゃるのを)、「子ながらも恥づかしと思すらむかし(実の子であっても今の様な密会はずがに恥じ入っているのだろう)」と、さばかりの人は(大臣ほどの人の上に立つ御仁なら)、思し憚るべきぞかし(思い遣りを持って遠慮なさるべきでしょうに)。

されど、いと急に(ひどく気忙で)、のどめたるところおはせぬ大臣の(大様に構える所の無い右大臣は)、思しも廻さず(おぼしもまはさず、何の配慮も無い)なりて(ままた)、畳紙を取りたまふままた(懐紙を拾おうと屈んだ時に)、几帳より見入れたまへるに(几帳の隙間から帳台を覗き込みなると)、いといたうなよびて(それはもうとても優雅に)、慎ましからず添ひ臥したる男もあり(悠然と尚侍に添ひ臥していた男も居たのです)。

今ぞ(男は大臣に見られた今になって初めて)、やをら顔ひき隠して(そっと顔を背け隠して)、とかう紛らはす(とかく誤魔化す素振りを見せました)。あさましう(右大臣は啞然として)、めざましう心やましけれど(痛に障り全く心外でしたが)、直面には(ひたおもてには、面と向かっては)、いかでか現はしたまはむ(さすがに暴き立てる荒み事は御避けになりました)。目もくるる心地すれば(目が眩む思いで)、この畳紙を取りて、寝殿に渡りたまひぬ(主殿に御戻りに成ったのです)。

尚侍の君は、我かの心地して(気が動転して)、死ぬべく思さる(死にそうな思いでした)。大将殿も、「いとほしう(姫には気の毒な事をした)、つひに用なき振る舞ひのつもりて(とうとう危険な遊びを重ねて)、人のもどきを負はむとすること(世間の非難を浴びるだろう事よ)」と思せど、女君の心苦しき御けしきを(姫の弱り切った様子を)、とかく慰めきこえたまふ(ともかくは宥めようと為さいました)。

#### [第二段 右大臣、源氏追放を画策する]

大臣は、思ひのままに、籠めたるところおはせぬ本性に(胸に収めて置く事が出来ない御性分の上に)、いとど(此処の所ますます)老いの御ひがみさへ添ひたまふに、これは何ごとにかは(是を如何して)とどこほりたまはむ(其のままになど致しておられましようか)。ゆくゆくと(何から何まで)、宮にも愁へきこえたまふ(大后にも相談申しなさいます)。

「かうかうのことなむはべる(こうした次第であった)。この畳紙は、右大将の御手なり。昔も、心宥されで(こころゆるされで、私の許しも無く)ありそめにけることなれど(始まった恋仲だったが)、人柄によるづの罪を宥して(姫の気持ちを察しては大将の無礼を許し)、さても見むと(それでは婿殿に迎えようかと)、言ひはべりし折は(申し上げた時は)、心もとどめず(気にも留めないように)、めざましげにもてなされにしかば(良い返事も為されなかったのを)、やすからず思ひたまへしかど(残念に存じましたが)、

さるべきにこそはとて(そうなる事が前世からの宿縁なのだろうと因果を呑んで)、世に穢れたりとも(処女を失っても)、思し捨つまじきを頼みにて(帝が姫をお迎え下さるであろう温情を頼みの綱として)、かく本意のごとく(こうして当初の約束どおり)たてまつりながら(入内奉りながら)、なほ、その憚りありて(やはり其の間違いに気後れして)、うけぱりたる女御なども(堂々と女御などとは)言はせたまはぬをだに(言って頂けずに尚侍で居る事さえ)、飽かず口惜しう思ひたまふるに(残念で口惜しく思っておりました所に)、また、かかることさへはべりければ(またこんな事が在って)、さらにいと心憂くなむ思ひなりはべりぬる(改めて全く情けなく為る限りだ)。

男の例とはいひながら(男の習性とは言え尚侍を寝取るとは)、大将もいとけしからぬ御心なりけり(大将も全く分別の無い事だ)。齋院をもなほ聞こえ犯しつつ(神聖な齋院にまで恋心を抱き)、忍びに御文通はしなどして(密かに恋文を交したりして)、けしきあることなど(どうも怪しいと)、人の語りはべりしをも(世間が噂しているのも)、世のためのみにもあらず(帝に恐れ多いばかりか)、我がためもよかるまじきことなれば(大将自身にも天罰が下りかねない事為れば)、よもさる思ひやりなきわざ(よもや然様な思慮の無い事を)、し出でられじとなむ(しでかす事は為さるまいと)、時の有職と(ときのいうそくと、当代一の知識人と)天の下をなびかしたまへるさま(天下を轟かして御出での御姿は)、ことなめれば(格別なのだろうから)、大将の御心を、疑ひはべらざりつる(疑い申しなかつた)

などのたまふに(などと御話しされる内に)、宮は、いとどしき御心なれば(大后はさらに激しい御気性なので)、いとものしき御けしきにて(顔色を御変えに為って)、

「帝と聞こゆれど(帝とは申し上げても)、昔より皆人思ひ落としきこえて(昔からどの人も軽んじ申して)、致仕の大臣も(ちじのおとども、辞職した左大臣も)、またなくかしづく一つ女を(またとなく大事にしていた一人娘を)、兄の坊にて(このかみのぼうにて、今上帝で御座する兄が春宮で)おはするにはたてまつらで(いらした許には差し上げず)、弟の源氏にて、いとさなきが(子供であったものが)元服の副臥に(げんぷくのそひぶしに、元服の夜の床入りの相手として)とり分き(残し置いて)、また、この君をも(我が妹の尚侍の君まで)宮仕へにと心ざしてはべりしに(帝が春宮でいらした時の御相手にと心積り致していたものを)、をこがましかりしありさまなりしを(源氏が無理矢理誘い込んで姫が帝の御相手としては体裁の悪い有様になってしまったのを)、\*誰れも誰れもあやしとやは思したりし(我の他は誰一人として源氏を責め立ては為さいませんでした)。 \*注に<弘徽殿大后以外、右大臣をはじめ誰一人も源氏を疑わなかつた、という意。>とある。しかし、源氏と六姫との仲は今上帝も知っている。「疑わなかつた」は如何にも奇怪しい。「あやし」は、それこそ「奇し、怪し」で<異常だ、変だ、疑わしい>でもあるが、「異し」で<けしからん、不届きだ>でもあり、であれば、責任追及をするのである。「やは」が反論表現だから、<「たれもおぼしたり」しなかつたではないか>なのだが、それは六姫を免責するためだった。「おぼす」と敬語なのだから、「たれもたれも」は右大臣家の自分以外の皆、である。

皆、\*かの御方にこそ(あの御方ばかりを)御心寄せはべるめりしを(気に入っていらしたようですが)、\*その本意違ふさまにてこそは(六姫は晴れて妻に迎えられるでも無く、晴れて女御として入内できるでも無く、その願いが適わぬ形で)、かくてもさぶらひたまふめれど(この様に尚侍として御所勤めを為さっているようですが)、いとほしさに(私は妹が不憫で)、いかでさる方にてても(如何にそうした身分であっても)、人に劣らぬさまにもてなしきこえむ(他の妃に見劣りしないように後宮の広い部屋を使えるように処遇致し申そう)、\*さばかり(そう取り計らえば、いくらかは)ねたげなりし人の(妬ましい源氏が)見るところもあり(目を見張ることもある)、などこそは思ひはべれど(などと心しておりましたが)、忍びて(姫本人は隠れてでも)我が心に入る方に(自分の気に入る源氏の方に)、なびきたまふにこそははべらめ(靡きなさってしまったというわけなのでしょう)。 \*「かの御方」や「はべるめる」といった突き放した言い方は相当に皮肉っぽい、のだろう。 \*「その本意」について、注には<『集成』は「源氏を婿という希望が」と解し、また一方、『完訳』は「入内させ、後の立后をと希望」の意に解

す。前者の説に従う。>とある。が、是は前後に掛かる洒落言葉ではないだろうか。このような場面で、そんな遊び心を表すものかとも思うが、是は芝居の台詞というか、芝居掛かった大後の憎まれ口と考えれば、十分有り得るといふか、十分成立する。\*「さばかり」は<そのくらい、それほど>という程度や量を示すらしいが、文意から推すと<そう図り>との洒落言葉に見える。とでも言い切らないと、何時までも納まらない。とにかく、此処の文節は全体が分かり難い。可也の難文だ。

齋院の御ことは(齋院に対する源氏の噂は)、ましてさもあらむ(この事から推し量ればいよいよ本当の事なのでしょう)。何ごとにつけても(何れにしても)、朝廷の御方に(おほやけのおんかたに、帝にとって)うしろやすからず見ゆるは(源氏が安心ならないように思えるのは)、春宮の御世(とうぐうのみよ、今の皇太子が即位なさった御代に)、心寄せ殊なる人なれば(世話役として期待を寄せる事が特別に大きい人なので)、\*ことわりになむあめる(当然の事と言えるでしょう) \*「ことわり」とは、源氏が帝にとって不安材料となる<理由>である。が、この言い方では、源氏が単に春宮の即位を楽しみにしている、と言っているだけの様にも見えるし、それ自体は後見役なら穏当な事で、寧ろ左うでない事の方が波乱要因である。何故なら、少なくとも形式上の立太子は今上帝の下した人事で、主軸の順当な後継は組織維持の基本なのだから。それでも、代替わりを「殊」に「心寄せ」していると言え、あたかも今上帝の早期退位を望んでいるようにも聞こえかねないし、少しでも秩序を乱す言動があれば謀反の疑いまで引き出す。是を扇動という。そして、疑わしい言動を失敗ないし失政という。これが、この場面でこういう言い方をする意味だ。

と、すくすくしうのたまひ続くるに(刺々しく言い立てなさいましたので)、さすがにいとほしう(右大臣はこのまま事を荒立てるのを六姫の体面からも疎ましく御思いに為って)、「など、聞こえつることぞ(何でこの気性の激しい長女に聞かせてしまったのだろう)」と、思さるれば(早まった気にも御成りに為って)、「

「さはれ(ともかくは)、しばし、このこと漏らしはべらじ(この事は他に口外いたさぬようになされ)。内裏にも奏せさせたまふな。かくのごと、罪はべりとも(この様に歴然と罪があつても)、思し捨つまじきを頼みにて(帝は御見捨てにならないだろうとの温情を頼りに)、あまえてはべるなるべし(大将は甘えているのであろう)。うちうちに制しのたまはむに(事を表向きに荒立てずに御諫め申しても)、聞きはべらずは(大将が聞き入れる事が無ければ)、その罪に(その断罪には)、ただみづから当たりはべらむ(必ず我自ら右大臣の職権を以って糾弾に臨む覚悟だ)」など、聞こえ直したまへど(言い繕い為されたが)、ことに御けしきも直らず(大後の御機嫌は治まりませんでした)。

「かく(このように)、一所に(ひとところに、同じ邸に)おはして隙もなきに(御出でで付け入る隙も無い尚侍に)、つつむところなく(大胆にも)、さて入り(忍び込み)ものせらるらむは(情痴に及びなきとは)、ことさらに軽め弄ぜらるるにこそは(これ見よがしに我を侮り為さった仕業ではないか)」と思しなすに(と御思いに為られると)、いとどいみじうめざましく(ますます以って忌々しくも腹立たしく)、「このついでに(この際にいっそ)、\*さるべきことども(中宮と東宮に組する源氏勢力を失脚させる)構へ出でむに(謀を企てるには)、よき\*たよりなり(いい機会になるだろう)」と、思しめぐらすべし(思い巡らしたようでした)。 \*「さるべきことども」は注に<『完訳』は「源氏や東宮を失脚させることを暗示する表現」

と注す。>とある。「構へ出づ」は<用意する>とか<態勢を整える>だろうが、「さるべきことども」が<敵勢力の排除>だとすれば、その<陰謀を企てる>くらいだろうか。下に「思しめぐらす」ともある。\*「たより」は<機会、契機>。

(2009年6月17日、読了)